

『程氏家塾読書分年日程』訳注（七）

松野 敏之・中嶋 諒

本稿は、朱子学研究会の読書会で扱った程端礼『程氏家塾読書分年日程』の訳注を試みるもので、本誌第一三号からの連載である。読書会の参加者は、以下の通りであり、本稿は担当者（氏名の上に「※」を表記）の草稿を元に作成している。

清水則夫（明治大学理工学部専任講師）・北澤絃一（元早稲田大学文学学術院講師）・宮下和大（麗澤大学モロロジー研究所専任研究員）・阿部光磨（早稲田大学文学学術院講師）・大場一央（早稲田大学文学学術院講師）・小池直（早稲田大学院博士後期課程）・原信太郎アレシヤンドレ（早稲田大学院博士後期課程）
・*中嶋諒（早稲田大学院博士後期課程）・*松野敏之（早稲田大学理工学術院講師）

【凡例】

・底本には常熟瞿氏鐵琴銅劍樓藏元刊本（四部叢刊所収）を用い、叢書集成本（清刊本・正誼堂全書本）・四庫全書本との校異を示した。但し、煩を避けるため、異体字・通仮字・同義語の類の異同は割愛した。

・解釈には、『程氏家塾読書分年日程』（昌平叢書所収）および姜漢椿校注『程氏家塾読書分年日程』（黄山書社出版、一九九二年四月）を参照した。

- ・訳注は、原文・校異・注釈・通釈の順で並ぶ。
- ・原文・訳文中の「」を附した部分は、底本では割注に相当する。
- ・注釈で引用した原文には「」を附して訓読を示した。但し、一読して明らかな場合には省略している。
- ・訳文中で（ ）を附した部分は、訳者の補注である。

【『程氏家塾読書分年日程』卷二（底本卷二・二十七丁表四行〜三十三丁）】

批點韓文凡例。「廣疊山法。」

議論體。

一、句讀、並依點經法。

一、大段意盡。

黑畫截。₃〔於此玩篇法。〕

一、大段內小段。

紅畫截。₃〔於此玩章法。〕

一、小段內細節目、及換易句法。

黃半畫截。₃〔於此玩句法。〕

一、論所舉所行事實、及來書之目、及所以作此篇之故、每篇首末常式。

黑側抹。₃

一、所論援引他書、及攷證、及舉制度、及舉前代國名。

青側抹。

一、所論綱要、及再舉綱要、及或問體問目、及提問之語、及斷制之策。

黃側抹。

一、義理精微之論。

黃中抹。₃

一、凡人姓名初見者。

紅中抹。

一、繳上文結上文緊切全句、或發明于事實之下、或先發明事之所以然于

事實之上者。

紅側圈。₃

一、轉換呼應字、及用力字、及繳結句內、雖已用紅側圈、而字合此例者、

每字。

黃側圈。₃〔於此玩字法。〕

一、假借字、先攷始音、隨四聲。

紅圈。₃

一、有韻之韻。

黑側圈。

一、造句竒妙者。

紅側點。

一、補文義不足。〔反覆提論德行、及推說虛敘總述其所以然。〕

黑側點。

一、譬喻。

青側點。

一、要字爲骨初見者。

黄正大圈⁽⁸⁾。

一、要字爲骨再見者。

黄正大點。

〔校異〕異同無し。

〔注釈〕

(1) 批点韓文凡例：唐謝枋得（号は暈山）『文章軌範』に収める唐韓愈の文章の批点に基づき、程端礼自身が整理・補足したもの。本誌第一七号二六五頁参照。

身が整理・補足したもの。本誌第一七号二六五頁参照。

(2) 点経法：『分年日程』卷二「批点経書凡例」を指す。本誌第一八号一一六頁参照。

(3) 画截：文字の下で区切る横線、断截線。「半画截」は、横線の長さが半分のもの。次頁の「点画截例」

参照。

(4) 側抹：文字の右側に引く傍線。

(5) 中抹：文字の上、中央に引く中線。

(6) 側圈：文字の右傍らに記す圈点（丸印）。

(7) 紅圈：朱墨によって記す圈点（丸印）。ここでは四声（平上去入）に随って、文字の四隅（左下・左

上・右上・右下）に記す、いわゆる圈発点のこと。次頁の「点画截例」参照。

(8) 正大圈：おそらく一文字全体を覆うような大きな圈点（丸印）のこと。

〔点画截例〕

次に『分年日程』（巻一・一五丁裏）より、傍点・半面截・圈発点の例を挙げる。併せて参照されたい。

朱程卷十五

不熟之理

朱子曰若不能做則
 講學無安頓處又
 曰古人之學以莊敬
 持守為先而讀書窮
 理以發其趣十數明
 友不勉令熟看注解
 以通念為先而徐思
 其義庶得
 正意毋得
 支蔓似方
 略有頭緒

自十五志學之年節當問志為學以道為志為
 人以聖為志自此依朱子法讀
 四書法或十五歲前用工失時
 失序者止從此起便讀大學章
 句或問仍兼補小學書

讀大學章句或問

一讀書倍溫書所讀字數分段看讀百
 遍倍讀百遍並如前法

傍点

（文字の右側に記す点）

半面截

（文字の下で区切る短い横線）

圈発点

（四声に随って文字の四隅に記す丸印）

〔通釈〕

韓愈の文章への批点の施し方（「批点韓文凡例」）。〔謝枋得（しよぼうとく）『文章軌範』における批点〕を敷衍した方法。〕

議論体。

一、句点・読点は、ともに經書への批点の施し方（「批点經書凡例」）に依拠する。

一、大段の文意が途切れた箇所。

墨による断截線。

〔ここで篇の使い方を玩味する。〕

一、大段の中の小段。

朱墨による断截線。

〔ここで章の使い方を玩味する。〕

一、小段の中の細かな節目や、轉換させる句の使い方。

黄墨による短い断截線。

〔ここで句の使い方を玩味する。〕

一、挙げられている具体例について論じている箇所や、出典となる書の要点、及びその篇を著した理由、各篇の冒頭・末尾にある常套句。

墨による傍線。

一、他書の引用の議論、考証、また制度を挙げている箇所、及び前代の国名を挙げている箇所。

青墨による傍線。

一、綱要の議論や、再び綱要を挙げている箇所、また或問体の文章の

質問部分や、問題提起の語、及び制度について論断した対策。

黄墨による傍線。

一、義理が精密な議論。

黄墨による中線。

一、初出の人名。

朱墨による中線。

一、前文をまとめ、総括している重要緊切な全ての句や、具体例を記した後に説明を加えている箇所、また具体例を挙げる前にあらかじめそうである理由を説明している箇所。

朱墨による傍圈点。

一、転換や呼応の文字、また重要な文字、及びまとめの句の中で、すでに朱墨による傍圈点を施してはいるが、この例にあてはまる文字があれば、その文字ごとに施す。

黄墨による傍圈点。

「ここで文字の使い方を楽しむ。」

一、仮借字は、まずもとの音を考えて、その四声に従って施す。

朱墨による圈点。

一、韻を踏んでいる箇所。

墨による傍圈点。

一、句のつくりがすばらしい箇所。

朱墨による傍点。

一、文義の不足を補っている箇所。「繰返し徳行を挙げて論じている箇所や、敷衍して客観的にそうである理由を総評している箇所。」

墨による傍点。

一、比喩。

青墨による傍点。

一、要となる文字が骨子として初めて用いられた箇所。

黄墨による大きな圈点。

一、要となる文字が骨子として再び用いられた箇所。

黄墨による大きな点。

敘事體。

一、句讀、並依點經法。

一、大段意盡。

黑畫截。〔篇法。〕

一、大段内小段。

紅畫截。〔章法。〕

一、小段細節目、及換易句法。

黄半畫截。〔句法。〕

一、敘所行事實、及年號、及人名爵里諡號、父祖妻子兄弟等、及敘所以

作此篇之故、銘曰、詩曰、及每篇首末常式。

黑側抹。

一、敘教詔對答之語。

紅側抹。

一、所敘引援他書、及考證、及舉制度、及舉前代國名。

青側抹。

一、所敘綱要、及再舉綱要、及提問之語、所提問難事實、雖已用黑側抹、

而合此例者。

黄側抹。

一、義理精微之論。

黄中抹。

一、凡姓名初見者。

紅中抹。

一、造句奇妙者。

紅側點。

一、反覆提論其德行、及推說其用心而虛敘總述其所以然、及補文義不足。

黑側點。

一、譬喻。

青側點。

一、繳上文結上文切緊全句、或發明于事實之下、或先發明事之所以然于

事實之上者。「敘事此例頗少、不可強求。」

紅側圈。

一、轉換呼應字、及繳結句內、雖已用紅側圈、而字合此例者、每字。

黃側圈。

一、假借字、先攷字始音、隨四聲。

紅圈。

一、有韻之韻。

黑側圈。

一、要字爲骨初見者。

黃正大圈。

一、要字爲骨再見者。

黃正大點。

〔校異〕

a 已：叢書集成本、「以」に作る。 b 一造句く青側點：叢書集成本・四庫全書本、此の三条を「一有韻之

韻」条の後に附す。 c 切緊：叢書集成本、「緊切」に作る。 d 字：叢書集成本、此の字無し。 e 紅圈

：叢書集成本・四庫全書本、「紅側圈」に作る。 f 點：四庫全書本、「圈」に作る。

〔通釈〕

敘事体。

一、句点・読点は、ともに經書への批点の施し方（「批点經書凡例」）に依拠する。

一、大段の意が尽きた箇所。

墨による断截線。

一、大段の中の小段。

〔篇の使い方（を玩味する）。〕

朱墨による断截線。

一、小段の中の細かな節目や、転換させる句の使い方。

〔章の使い方（を玩味する）。〕

黄墨による短い断截線。

一、具体例の叙述、また年号、人名・爵位・郷里・諡・号、父祖・妻

子・兄弟など、及びその篇を著した理由を叙述している場合、

「銘に曰く」や「詩に曰く」といった引用、各篇の冒頭・末尾に

ある常套句。

墨による傍線。

一、教示や返答の語を叙述している箇所。

朱墨による傍線。

一、他書の引用の叙述、考証、また制度を挙げている箇所、前代の国名を挙げている箇所。

青墨による傍線。

一、綱要の叙述や、再び綱要を挙げている箇所、及び問題提起の語や、難解な具体例に対する問題提示がなされている箇所、またすでに墨による傍線を施しているが、この例にあてはまる箇所。

黄墨による傍線。

一、義理についての精密な議論。

黄墨による中線。

一、初出の人名。

朱墨による中線。

一、句のつくりがすばらしい箇所。

朱墨による傍点。

一、繰返し徳行を挙げて論じている箇所や、意を注いでいるところを敷衍して、客観的にそうである理由を総評している箇所、また文義の不足を補っている箇所。

墨による傍点。

一、比喩。

青墨による傍点。

一、前文をまとめ、総括している重要緊切な全ての句や、具体例を記した後に説明を加えている箇所、また具体例を挙げる前にあらかじめそうである理由を説明している箇所。「叙事体ではこのような例は非常に少ないので、無理に探し求めることはない。」

朱墨による傍圈点。

一、転換や呼応の文字、及びまとめの句の中で、すでに朱墨による傍圈点を施してはいるが、この例にあてはまる文字があれば、その文字ごとに施す。

黄墨による傍圈点。

一、仮借字は、まずもとの音を考えて、その四声に従って施す。

朱墨による圈点。

一、韻を踏んでいる箇所。

墨による傍圈点。

一、要となる文字が骨子として初めて用いられた箇所。

黄墨による大きな圈点。

一、要となる文字が骨子として再び用いられた箇所。

黄墨による大きな点。

刊印日程空眼簿式

讀經日程「詳見工程⁽¹⁾。專治一書。」

年⁽²⁾

月

日

生員

一、早令倍讀册首已讀書、至昨日書一遍。太長則分。起止⁽³⁾

一、面試倍讀昨日書。

一、面授本日書。計字數以約大段。起止⁽⁴⁾

面以大段分細段、令朱記段數。

每細段、面令讀正過句讀字音、面說正過文義。

一、令每細段先看讀百遍。

即又倍讀百遍。

數足、挑試倍讀倍說過、面墨銷朱記、後段如前。

段足、令通作大段、倍讀試過。起止⁽⁴⁾

一、挑試夜間已玩索書。起止

一、面授說已讀書、就令反覆說大義、面試過。起止

一、雙日之夜玩索已讀書。起止

又玩索性理書。起止

一、雙日之夜、以序倍讀凡平日已讀書一遍。起止

又温讀性理書。 起止

一、令假日倣定本點句讀圈發字音。

凡書忘誤處朱記、即補熟墨銷。

思勉齋

〔校異〕

a 起止：叢書集成本・四庫全書本、此の二字無し。 b 面：四庫全書本、「而」に作る。 c 前：叢書集成本、「何」に作る。 d 起止：叢書集成本・四庫全書本、此の二字無し。 e 索：叢書集成本、「素」に作る。 f 假：叢書集成本・四庫全書本、「暇」に作る。 g 字音：叢書集成本、「字音」の後に「○」を附す。 h 誤：叢書集成本・四庫全書本、「記」に作る。

〔注釈〕

(1) 工程：『分年日程』卷一冒頭から卷二（本誌第一五号から第一八号）までに載せる具体的な教育課程を指す。

(2) 年月日生員：ここに「日程空眼簿」を用いた年月日と生員（科挙を受ける資格を得た学生）の姓名を記す。

(3) 起止：始めと終わり。ここでは、生徒が読む書の始めと終わりのこと。

(4) 令朱記段数：読むべき箇所の小段の数だけ、朱筆で「日程空眼簿」に点を記すこと。『分年日程』卷一（本誌第一五号五一頁）に「於内分作細段、……用朱点記于簿」〔内に細段を分け作り、……朱点を用ひて簿に記す〕とある。

(5) 凡書忘誤処朱記、即補熟墨銷…「工程」(卷一・卷二)に端的な説明はないが、卷一に「生處誤、處、記號以待夜間補正遍數」(「生處・誤處は、記号して以て夜間を待ち遍數を補ひ正す」)(本誌一五号四八頁)、「用朱點記于簿、…：…每細段二百遍足、即以墨銷朱點」(「朱点を用ひて簿に記す、…：…細段毎に二百遍足れば、即ち墨を以て朱点を銷す」)(同五一頁)とあるのを踏まえれば、忘れたり誤ったりした箇所については、補うべき暗誦の回数だけ朱筆で「日程空眼簿」に点を記しておき、実際に暗誦して補つて、その箇所熟達したら、その朱点を墨で消していくことであろう。

(6) 思勉齋…浙江甬江の東に位置する程端礼の書齋の名。『分年日程』卷三末尾に、「右読書分年日程…：…元統三年十一月朔、程端礼書於甬東之思勉齋」とある。

〔通釈〕

刊印「日程空眼簿」の書式

經書を読む日程「詳しくは工程を参照せよ。一冊の書だけをおさめるようにさせる。」

年 月 日 生員

一、早朝には最初の書の、昨日までに読み終わったところまでを一通り暗誦させる。著しく長文である場合は、分割させる。 起・止

一、昨日授けた書の暗誦を前で試す。

一、直接、本日の書を授ける。字数をはかって、大段をまとめておく。 起・止

大段を小段に分割し、朱筆で小段の数(だけ点)を記させる。

小段ごとに面前で読誦させ、句読や字音を正す。また文義を説かせ、正す。

一、小段ごとに、まずは百回ほど素読させる。

続けて百回ほど暗誦させる。

回数を満たした後、暗誦できているか試す。暗誦し終われば、墨筆で朱筆の点を消す。後段もこのようにする。

小段を全て終えた後、大段を通して暗誦させ、試す。 起・止

一、すでに夜間に玩味した書を試す。 起・止

一、読了した書（の文義）を説くことを授け、繰り返し大義を説かせ、面前で試す。 起・止

一、奇数日の夜には、すでに読了した書を玩味させる。 起・止

また性理書を玩味させる。 起・止

一、偶数日の夜には、日ごろ読了した書を順序通りに一通り暗誦させる。 起・止

また性理書を復習させる。 起・止

一、仮日には、手本に倣って、句読点や圈発点を施させる。

忘れたり間違ったりした箇所はみな、朱点を記しておく。暗誦を繰り返して補い習熟したならば、その朱点を墨筆で消す。

思勉齋

讀看史日程「五日一周。詳見工程。」

一日、以序倍讀四書經注或問一遍。

以序倍讀經正文。

夜讀看性理書、并溫。

一日、以序倍讀本經傳註一遍。

以序倍讀經正文。

夜讀看性理書、并溫。

一日、看讀說記通鑑。

參合看史。

夜做點史、攷釋文。

一日、看讀說記通鑑。

參合看史。

夜溫記史。

一日、看讀說記通鑑。

參合看史。

夜溫記史。

年 月 日 生員

日填起止。

思勉齋

〔校異〕 異同無し。

〔注釈〕

(1) 説記：おそらく史書や『通鑑』などを解説し暗記すること。「工程」の「看通鑑」に「説」「記」に関わる記述は、「至於一事之始末、一人之姓名爵里諡號世系、皆當子細攷求彊記」(「一事の始末、一人の姓名・爵里・諡・號・世系に至りては、皆當に子細に攷求彊記すべし」)(底本卷二・一丁)と見えるのみ。しかし、程端礼自注に「又曰、……每看一代正史記、却去看通鑑」(「朱子」) 又た曰く、……一代の正史を看て記す毎に、却つて通鑑を看去く」(底本卷二・一丁)、「果齋史先生云、……須約友三四人同看、其先一人用濟河焚舟法、只頭一遍看一板、即要盡記、……其後一人繼之、又其後一人繼之、三人皆了會一處、先令一人説兩人證其是非、餘人以次説證如前」(「果齋史(蒙卿)先生云ふ、……須らく友三四人と約して同に看るべし、其れ先づ一人河を濟りて舟を焚くの法を用ふ、只だ頭一遍に一板を看、即ち尽く記さんことを要す、……其の後一人之に繼ぎ、又た其の後一人之に繼ぐ、三人皆一處を了會すれば、先づ一人をして兩人に説き其の是非を証さ令む、余人は次を以て説き証すこと前の如し」)(底本卷二・三丁) などのように、史書の暗記すべきことと説き明かすべきことを傍証として引用している。現行の「工程」には明記していないが、程端礼も史書の暗記と解説を求めていたことがうかがえる。

(2) 釈文：……司馬光『資治通鑑』に語釈・音注を附した、北宋史焯『通鑑釈文』三十卷、もしくは北宋司馬

康『通鑑釈文』二十巻を指す。本誌第一七号二六一頁参照。

〔通釈〕

史書を読む日程「五日で一巡することとする。詳しくは工程を参照せよ。」

年 月 日 生員

一日、四書の本文・注・或問を、順序通りに一通り暗誦する。

経書の本文を順序通りに暗誦する。

夜には性理書を素読、復習する。

一日、五経の本文・伝・注を、順序通りに一通り暗誦する。

経書の本文を順序通りに暗誦する。

夜には性理書を素読、復習する。

一日、『資治通鑑』を素読し、解説・記憶する。

史書を参看する。

夜には史書の批点を写し、『通鑑釈文』を参照する。

一日、『資治通鑑』を素読し、解説・記憶する。

史書を参看する。

夜には史書を復習する。

一日、『資治通鑑』を素読し、解説・記憶する。

史書を参看する。

夜には史書を復習する。

毎日、起・止を記す。

思勉斎

讀看文日程〔六日一周。詳見工程。〕

一日、以序倍讀四書經注或問一遍。

以序倍讀經正文。

夜攷索制度治道書。

一日、以序倍讀本經傳注一遍。

以序倍讀經正文。

夜攷索制度治道書。

一日、温記通鑑。

以序倍讀經正文。

夜攷索制度治道書。

一日、讀看玩記文法。

温記文法。

年 月 日 生員

夜鈔點抹截文。

一日、讀看玩記文法。

温記文法。

夜鈔點抹截文。

一日、讀看玩記文法。

温記文法。

夜鈔點抹截文。

日填起止、及所考所鈔。

〔校異〕異同無し。

〔通釈〕

文章を読む日程〔六日で一巡することとする。詳しくは工程を参照せよ。〕

年 月 日 生員

一日、四書の本文・注・或問を、順序通りに一通り暗誦する。

經書の本文を順序通りに暗誦する。

夜には制度・治道の書を考索する。

一日、五經の本文・伝・注を、順序通りに一通り暗誦する。

經書の本文を順序通りに暗誦する。

思勉齋

夜には制度・治道の書を考索する。

一日、『資治通鑑』を復習、記憶する。

經書の本文を順序通りに暗誦する。

夜には制度・治道の書を考索する。

一日、文章の法を玩味、記憶する。

文章の法を復習、記憶する。

夜には批点・抹線・断截を写す。

一日、文章の法を玩味、記憶する。

文章の法を復習、記憶する。

夜には批点・抹線・断截を写す。

一日、文章の法を玩味、記憶する。

文章の法を復習、記憶する。

夜には批点・抹線・断截を写す。

毎日、起・止と考索したところ、書写したところを記す。

思勉齋

讀作舉業日程「十日一周。九日讀看、一日作。旋増作文日。」

年 月 日 生員

の早朝は、經書・「離騷」・韓愈の文章を復習する。

九日間の食後には、科挙の文章を読む。性理・制度・治道・故事については、一通り読み終わったらまた始めから読み直す。

九日間の夜には、三場四類の試験に基づき、結構・批点・抹線・断截を写す。
一日、終日科挙の文章を作る。

夜には作った文章を改める。

毎日、起・止と読み、写し、批点を施したところを記す。詳しくは工程を参照せよ。

思勉斎

小學「習字演文。」日程「讀經四日内分一日。詳見工程。」
年 月 日 生員

一、早令倍讀册首已讀書、至昨日書一遍。太長則分。

一、令影寫智永千文楷書、約一二十紙。寫五七日一易様。

一、以已讀說小學書作口義。

呈 改 上簿

一、說認記字門類、平仄虛實動靜等。

一、漸長、學切韻、攷字始音、偏傍、音義、假借等。

一、夜以序倍讀已讀書一遍。

日填起止、及所看所作。

思勉齋

程氏家塾讀書分年日程卷二。

〔校異〕

a 冊首：叢書集成本、「冊書首」に作る。 b 五七日一：叢書集成本、「五七一」に作る。四庫全書本、「四千字」に作る。 c 仄：叢書集成本、「反」に作る。 d 程氏家塾讀書分年日程卷二：叢書集成本、此の十二字無し。四庫全書本、「讀書分年日程卷之二」に作る。

〔注釈〕

- (1) 智永千文：智永の書いた『千字文』のこと。本誌第一五号五八頁参照。
- (2) 呈改上簿：未詳。「工程」(『分年日程』卷一・二)に説明は見られない。
- (3) 切韻：反切のこと。反切の上字を「切」、下字を「韻」という。姜漢椿氏は、同名の隋陸法言等の書とするが、本稿ではこれを取らない。

〔通釈〕

小学「文字の学習と文章の練習」の日程「經書を四日読むうち、一日を割り当てる。詳しくは工程を参照せよ。」

年	月	日	生員
---	---	---	----

一、早朝には最初の書の、昨日までに読み終わったところまでを一通り暗誦させる。著しく長文である場合は、分割させる。

一、智永『千字文』の楷書を、約十から二十紙くらいに透写させる。五、七日に一度、手本を替える。

一、すでに読了した『小学』の意味内容を口述させる。

呈 改 上簿

一、学んで覚えた平仄や虚実・動静といった文字の分類について説明させる。

一、次第に成長していけば、反切を学ばせ、文字の元の音や偏傍・音義・仮借などを考索させる。

一、夜には、すでに読了した書を順序通りに一通り暗誦させる。

毎日、起・止と読ませ、写させたところを記す。

思勉斎

以上、『程氏家塾讀書分年日程』卷二。